

学校におけるボランティア活動等社会奉仕体験活動の展開モデル

1 学校におけるボランティア活動等社会奉仕体験活動の意義

前章で述べたように、本研究の方法論は、都内の先進的な事例に学んで、それらに共通する学習活動の展開過程をモデル化し、促進のための方策を得ようというものである。

事例の収集に先立ち、本研究では、文部科学省や中央教育審議会における定義等を参考に⁽¹⁾、ボランティア活動等社会奉仕体験活動を「児童・生徒が、人や社会のために役立つ活動を通して、人間への深い理解を伴った思いやりをはぐくみ、地域の一員としてよりよい社会を創っていくための力をつける体験学習」と定義した。そして、このような力を子どもたちにはぐくんでいくために一定程度の継続性と計画性をもった組織的な取り組みが可能であるところに、学校教育においてボランティア活動等社会奉仕体験活動を取り入れていくことの意義が見いだせると考えた。

都内の先進的な事例は、上述の定義及び意義を踏まえ、7つの観点(4頁)に従って収集し、分析を行ったが、以下に述べる特徴からも学校教育における活動の意義を具体的に確認することができる。

2 先進的な事例の特徴

(1) 人との出会いやかかわりを重視していること

先進的な事例では、児童・生徒と地域等で暮らす人々との出会いやかかわりが重視されている。そこには、人とかかわる地域等でのリアルな体験が、子どもたちの成長発達にとって欠かせないという理解がある。子どもたちは、地域等で人とかかわることで「人から学ぶ」「人と共に学ぶ」ことができ、人とのかかわりの中ではぐくまれた新たな考えやものの見方は、多角的・複合的なものへと発展する。また、心揺り動かす体験を積み重ねていく中で、人と接する心地よさを味わうことが、誰に対しても思いやりをもって接することができる豊かな心を子どもたちにはぐくむことができる⁽²⁾。

(2) 人間への深い理解を伴った思いやりと児童・生徒の変容

先進的な事例では、子どもたちの変容において著しい結果が見られる。A市B小学校での取り組みが、集合住宅に住む高齢者に対する児童の主体的なゴミ出し活動へと発展していったという事例は、マスコミ等でも取り上げられ注目された活動の一つである。また、障害者施設への訪問活動を児童自身が定例化していったC区D小学校の事例や、地域の行事や施設のイベントに生徒が進んで参加するようになっていったE区F中学校の事例などもある。

このように先進的な事例では、児童・生徒が学んだ成果を生かし、自ら進んで活動を広げてきているが、どの事例も最初からこのような活動が予定されていたわけではない。児童・生徒にとって、ボランティア活動等社会奉仕体験活動は、自然発生的に始まることはあまりなく、必ずやそこに大人の働きかけや、それに伴った児童・生徒の心の揺れ動きや育ち合いの関係等が存在する。このような場が、学校におけるボランティア活動等社会奉仕体験活動であり、先進的な事例に共通して見られるところである。

児童・生徒の心の動きとしては、例えば、G区H小学校の場合には、高齢者施設への訪問をすることになった児童が、「お年寄りには寂しいから歌を歌ってあげよう」「喜んでくれたみたい」「今度は一緒にゲームをしよう」「ゲームは難しかった人もいたなあ」「本当は何

がしたいのだろう」「今度はゆっくり話を聞くことにしよう」「お年寄りっていろいろなことを知っているんだな」というように認識が変化してきている。

思いやりが育つ過程を研究している平木典子氏によれば、思いやりとは相互理解の基本であり、まず自分自身を振り返り「こんなとき、自分はどうかだろう」と考えてみることから始まるという。その次に、その気持ちや思いをあてはめ、相手の思いを想像してみようとする。ある状況下で、「自分が寂しければ、相手も寂しいかもしれない」と考える。

平木氏は、この段階を自分の思いを働かせることによる思いやりの第一ステップとする。これに加えて、第二のステップでは、相手の立場や相手の身になって理解することに、人が一人一人違うこと、人によって同じことでも違った思いをすることを含める。「自分ならこんなふうを感じるけれど、あの人は自分とは違うから、あんなふうを感じるかもしれない」といった理解が出来るようになる。相手を思いやるには、相手のパーソナリティやものの見方、感じ方の特徴を理解し、そこに立って状況をとらえ直してみる作業が必要となる⁽³⁾。

上記G区H小学校における児童の心の動きは、平木氏が整理したように、児童が自らの感じた必要が、体験活動を通して、人間に対する深い理解を伴った思いやりへと広がってきていることを示すものである。

(3) 「振り返り」機会の多様な設定と教師のかかわり

先進的な事例では、上述したような児童・生徒の心の動きが数多く見られるが、そこには、「計画」「体験」「振り返り」といった一連の過程を何度も何度も繰り返すことができる様々な工夫が用意されている。例えば、A市B小学校では、グループで活動することそれ自体を一連の過程を繰り返す重要な機会として積極的に位置付け、「グループワークトレーニング」やグループ間の情報交換（掲示板の活用や体験の交換）を重視した活動を展開している。また、E区F中学校では、中間報告会において、一人一人ができるだけ多くの人と意見交換ができるように、別のグループのメンバーと新しいグループを作り報告をし合うような方法を積極的に取り入れている。

また、一連の過程を繰り返し行うための様々な工夫に加えて、先進的な事例の多くでは、教師の働きかけとして次のような共通点、すなわち、児童・生徒の活動が常に次のような視点から問い直されていた。

- ・ 友達や地域の人々など他者とのかかわりの中で自己を高められる活動であること
- ・ 切実感をもって意欲的に取り組める活動であること
- ・ 学ぶ楽しさや成就感・達成感を得られる活動であること
- ・ 人や地域に喜ばれる活動であること
- ・ 学校で学んだことを生かせる活動であること

中でも、その活動が切実感をもって意欲的に取り組める活動であるかどうかということは、重要な視点である。A市B小学校では、教師が、様々な機会を利用して「なぜその活動をするのか」「活動をさらに発展させられないか」といった問いかけを児童・生徒に繰り返し行っている。

また、児童・生徒に体験後の感想を求めることは多いが、そのような場合であっても、相手の表情などに気を配る必要があるといった明確な指示を事前に出しておくことなど、先進的な

事例では、活動の見通しをもった教師の働きかけの在り方が常に意識されている。

(4) 児童・生徒の心の動きを支える保護者・地域・関係諸機関

先進的な事例が、地域の人々との直接的なかかわりやリアルな体験を重視していることは既に述べた。この点で、校内における車いす体験やアイマスク体験などのいわゆる擬似体験は、実際の活動のための準備として最小限に位置付けられる。先進的な事例では、たとえ擬似体験ではあっても、その活動に保護者や地域の人々の参加が多く見られる。保護者・地域・関係諸機関は、児童・生徒の心の動きを支える重要な援助者であり、必要のある場面でのみかかわるといよりは、「計画」「体験」「振り返り」の全過程を通して継続的にかかわることができるような工夫がなされている。

その典型は、例えば「学習のまとめ」に見られる。先進的な事例の多くは、「学習のまとめ」において、活動にかかわったすべての人々と共にその活動の意味を「振り返り」、児童・生徒の意識や活動が深化してきたことを確認し合い、共に喜び合う。学校におけるボランティア活動等社会奉仕体験活動で築かれた人と人との関係、学校と地域との関係をこれからも大切にしていこうとしている。

(5) 学校全体が有機的に結びつく校内推進体制

先進的な事例では、ボランティア活動等社会奉仕体験活動に関する専門の窓口や委員会が設置されている。J区K中学校では、ボランティア活動係を教務系の校務分掌に位置付けている。これは、ボランティア活動等社会奉仕体験活動に関する専門の窓口や委員会が、児童会や生徒会に関する分掌に置かれる傾向にある現状にあっては、ユニークな試みである。専門的な窓口や委員会がどの分掌に置かれるかは、先進的な事例においてもそれぞれ異なるが、共通しているのは、設置された窓口や委員会が、単なる一つの組織として機能としているというよりも、校内組織全体との有機的な結び付きが強く意識されていることである。J区K中学校の試みもボランティア活動係と校内のあらゆる組織と関連を考えてのことである。

以上、先進的な事例の分析から、その特徴と思われる事柄を整理した。以下では、さらに共通して見られる学習活動の展開過程をモデル化し、促進のための具体的方策を示したい。

注

(1) 文部科学省内部検討資料では「活動の概念整理」として次のようにまとめている。

体験活動	日常に得にくい体験を目的として行う活動
社会奉仕体験活動	社会のために役立つことをする活動を通じて、社会の本質である人々が相互に助け合う関係を学んだり、思いやりの心を養ったりといった社会奉仕の精神を涵養するために行われる体験活動
ボランティア活動	個人の自発的意志に基づき、労働の対価を目的とせず、自分の時間を提供し、社会のために役立つことを行う活動
自然体験活動	自然の中で自然を生かした活動を行う体験活動

	その他の体験活動の例	勤労生産体験活動 職業体験活動、就業体験活動 芸術・文化体験活動
--	------------	--

(参考：日本ボランティア学習協会『ボランティア学習』H13.11)

また、「ボランティア活動」への注目は、歴史的には、昭和56年の国際障害者年、7年前の阪神淡路大震災、そして今回の教育改革があり、いずれも、狭く教育界に限定されることなく、社会全体でその気運を高めていく必要とボランティア活動等の教育的意義についての言及がその都度なされてきた。青少年に対するボランティア活動等の教育的意義について、研究や報告書に数多く引用されているものに、『平成6年総務庁青少年問題審議会の意見具申』がある。

「自己実現」に向けて：自分の生き方や社会的存在の意味を自らの手で見いだす

「社会的存在の確認」に向けて：社会生活を営む上で必要な規範やルールを自覚する

「主体性と創造性の開発」に向けて：主体的態度を身に付け、創造的に取り組む

「社会意識の開発」に向けて：社会の一員として社会的課題を発見し、解決していく

これら4つの教育的意義のうち、最初の3つは、これまでも多く指摘されてきたことであるが、4つ目の「社会の一員としての社会的課題を発見し解決していく」という社会意識の開発に関しては、国際的な動向とも連動して、今日、最も注目が集まっている事柄であると考えられる。

(2)立川市立若葉小学校「平成14年度校内研究 授業者 福原冬彦」H14.10.7より

(3)平木典子「思いやりを育む」『児童心理』 733 平成12年6月